

農研機構

リンゴ「紅つるぎ」開発 円筒樹形で作業効率化

農業・食品産業技術総合研究機構（つくば市、農研機構）は、枝が横に広がらず密集して実を付けるリンゴの品種「紅つるぎ」を開発した。商業用として、横に広がらない樹形の品種開発は国内で初めて。食味に優れるほか、従来の品種と比べて生産者の作業の効率化や省力化が期待される。

同機構は、生産者やリンゴの栽培面積が減少する中、将来にわたって安定供給につなげようと、約30年前、現在の果樹茶業研究部門盛岡研究拠点（岩手県）で品種育成を開始した。紅つるぎは、早生品種「さんさ」と「ふじ」に、側枝が極端に短

いなどの性質を持つ「ふじ」を掛け合わせて選抜された品種。軸が短く、果実の着色を促す管理方法「玉回し」はできないため、果実全面に色は付かない。しかし、甘味と酸味のバランスが取れ、「ふじ」「つがる」などと肩を並べるほどに食味

に優れているという。これまでの品種は枝が横に広がる「分枝型」の樹形のため、枝のせん定をはじめ摘花や収穫作業で生産者の手間がかかる。

一方で、新品种の紅つるぎは、コンパクトな円筒型の樹形で、横に枝が出づらいため、余分な枝が出にくく、せん定量が少なくなる。また、摘花や収穫の動きが少なく済むという。

同機構は、2015～22年、本県を含むリンゴの生産地の14道県で試作試験を実施。本県でも栽培が可能となることが分かっていく。

今後、苗木は品種登録後、種苗会社で栽培していく。苗の供給が始まるのは数年後となる見通し。

同機構果樹茶業研究部門の沢村豊グループ長補佐（55）は「高齢でも続けられ、新規就農者も比較的取り組みやすい」とし、「生産量が減少する中でも、リンゴを身近な果物として感じてもらえる可能性がある品種」と話した。

農林水産省のまとめでは、20年前の2004年産の全国のリンゴの収穫量は75万4400ト。対して直近の23年産は前年比18%減の60万3800トとなり、減少傾向にある。

（鈴木聡美）



コンパクトな樹姿の「紅つるぎ」（農研機構提供）

【問1】 紅つるぎの特徴は？
枝が横に広がらず
密集して実を付ける

【問2】 紅つるぎのもとになった品種は？
「さんさ」と「ふじ」

【問3】 2023年のリンゴの収穫量は、2004年の約何%に減少した？
約80%に減少
(603800÷754400×100=80.03)



よ 読めない文字は、かぞくや、ともぞちにきいてみてね